

## 中庭



洋館・離れ・樂々荘・主屋に囲まれた中庭。またそれらの建物を、飛び石によって繋いでいる。樂々荘の周囲には玉石敷きの泉水が配され、一見すると建物が水上に建っているように見える。  
主屋の前面にある手水鉢の石の下には、水琴窟があるとのこと。  
また、洋館へあがるステップは、青色や赤色や黄色などの色とりどりのタイルが敷き詰められている。  
このように洋館・和館ともに、それぞれの建物の特徴に合わせた施設を中庭に面した箇所に置きつつも、中庭の雰囲気を壊さずに、豊かな表情を中庭にあたえている。

## 来賓用門



出入り口は2つ。北側は家主や日々の出入口である。  
南側の出入口は来賓用の門であり、凝灰岩と花崗岩が使われた門柱に、頂部にはランプがある。凝灰岩は方形を基本にし、門扉に接する部分には縦長の花崗岩が使われている。  
また色調にも注意が払われてあり、凝灰岩の色調と形がそれぞれ左右対称になるように作られている。

## 合田邸の歴史

聞き取りにより、合田邸は昭和3年には現在の姿になったことが分かった。ただ、すべての建物が一時期に建てられたのではなく、2代目房太郎によって主屋・離れ・レンガ倉庫・土蔵を、3代目健吉によって洋館・大広間・書斎・応接間・玄関が昭和3年に建てられたということだ。

また、本邸は多度津七福神と呼ばれた富豪が居住していた現存する唯一の邸宅で、さらに洋館の地階・土蔵・土間などが鉄筋コンクリート造であるのは、県内の住宅建築としては最初期の事例。本邸の昭和3年建設の建物は、あめりか屋出身の松永某の設計による可能性があり、当時の最先端の技術とデザインが試みられたのではないだろうか。彼は旧引田郵便局の設計も県内では手がけている。

合田邸を訪れた人物には、第68代・69代首相の大平正芳、歌人の北原白秋や吉井勇など、政治家や文化人など数多く集ったことが知られ、七福神の存在の大きさが実感できる。

合田邸について、まだ分からぬことは多くあるが、本邸は讃岐の近代産業や文化を牽引した多度津七福神の歴史的役割や、多度津に端を発した四国の近代化の足跡を知る上での、重要な財産といえる。

武田寿さん・合田生さんの聞き取りを参考にしました

# 合田邸一見取図

大広間 樂々荘 命名は北原白秋



大広間の大きさは30畳、縁側は20畳あり、外回りは大きなガラス戸で仕切られ、広間から中庭への視線を遮るものなく空間の広がりを感じさせる。内部を照らすシャンデリアには、合田家の家紋である方団が金色の装飾によってあしらわれ、漆塗りの下地に映える。折上格天井の桟もまた漆塗りである。建物の構造は伝統的な書院造の構えをとっているものの、モダンな雰囲気となっている。

## 書斎



書斎の外観は、ヨーロッパのハーフチンバー様式を髪隠せる急勾配の屋根や外壁に柱材を露出させる構造がみられる。一方で、基礎部分に自然石を積上げ、外壁の下半分は杉板張り、上半分は土壁と、日本の数寄屋造りの要素もある。全体を見渡すと和と洋を上手く組合わせた山小屋風の造りとなっている。

内部の机とアールデコ風の椅子は書斎建設時に合わせて作られたと言われ、奥には、作り付けの重厚な扉の金庫がある。

## 応接間



入口横に、羽を広げた鶯をかたどった帽子掛けがある。

内部はガス暖炉と机、幾何学模様が肘掛けなどに施されたアールデコ風の椅子があり、応接間建設時に合わせて作られたと言われている。

東から光を取り込む長方形のステンドグラスには、花を中心におしゃらな構図がとられ、こういった具体的な素材を題材にしたステンドグラスは、応接間と洋館にのみ造りつけられている。

公開場所：   
順路：

